

江の人で東近江へいて帰ルさとおしやるか 左様で御座り升
 扱御坊にちとたつねたい事がある 夫は如何ようふな事で御
 座り升か 此長刀をこふかまへたが早かるふか こふかまへた
 が早かるふか 私ハ出家の事で御さる二よつて其様な事ハそん
 じませぬ 何んじや知らぬ ア、あふのふござる 其
 筈で請た心かあつて面白い 切れまいと思切てみせふ ア、あ
 ふのふ御座る さあをこいてをくりやれ 畏て御座
 る 此長刀がこわいか 左様で御座り升 さあをこい
 ておくりやれ 畏て御さる 扱々御坊ハ気げんのよい人しや
 此辺りニ存た茶やかある 是へ参て一ばんのふるまを、夫
 はご無用ニ被成ましよふ さあ手を引ておくりやれ 畏
 て御さる 扱々御坊ハ気げんのよい人しや 一ツばんのふるま
 お、夫ハ忝のふ御さる ヤイ茶や 何んで御座る
 今日夕御出家を同道した 一ツばんのこしらへ 畏て御座る
 サア通らしませ 心得ました 此長刀を立ておこふ
 ア、柱がうごいてたため こにおこふ 扱々たふれたる哉
 ちと是へ仍て腰をうつておくりやれ 畏て御座る エイ
 此あたりてよふ御座りまするか 私ハ今朝ハ早ふ御座り
 ました二よつてねむりました 御ゆるされて被下ましよふ 出
 家の事じや二依てかんにんのをけ こんとハこちらをもんて
 おくりやれ 畏て御座る 此辺てよふ御座り升か ア、よ
 ふ寝いられたそふな のふ御亭主 あれハ何ん
 といふ人て御座る あれを知らせられぬか い、やしりませ

ぬ あれハ六角堂の悪坊といふて大の酔狂人じや 一杯のふて
 ハ壺寸ぬき二杯のふてハ式寸ぬきて あの人ニ出おふ人ハ一ヶ所
 二ヶ所疵をこふむらぬといふ事ハ無いか そなたハ疵ハこふむら
 なたが いや疵ハこふむりませぬが 左様で御ざらバ私を
 いなして被下 いやそなたをいなしてハ身供が跡で迷惑い
 なたす 左様でハ御ざりましよふか 私ハ出家の事で御さる二
 によつておまへの後生ニも成らふ程ニどふぞいなして下され
 そふあらバとも角もさせられい 夫は忝のふ御さる いたし
 よふか御座る 己さい前身供をなふつたかよいか是かよいか 此
 長刀のは二のするぞ おちやこわもの先急て参ふ ウン能ふ寝
 た事哉 誰か湯か茶かくれい こりやとこしや知らぬ宿かと思ふ
 たれはいつもの茶やしや 先急いて帰ふ 長刀がありそふな者じ
 や 傘がある 是りや何んじや せんしふの座ぜんをする時もつ
 しろふとやらいふ物じや こりや何んしや 衣がある こりや
 一ツも合点の行ぬ 身供ハ内をつる時ハ 小袖をつぼをり刀をさ
 し 長刀を横たへて出たかこりや壺ツも無い ア、こふ夢うつ、
 のよふに覚ゆるが出家を壺人同道した 某日頃大酒をのふて酔狂
 をいたすニ依てしか、だるまの御出被成て このよふ二なつたも
 のてあろふ このよふなすかたに成るふとハ夢思ハなんだ
 今日よりしてハ 御しよふを願ふ ウタイおもいよらすのんせい
 や、小袖ニかへた此衣 刀ニかへた此しよるふ 長刀ニか
 へたる此傘を かたけてずたニいしよふよふ あんによふ
 僧にはつちを申さふ はつち

73 こりや誰やらつぶてをうつた 畑主が見舞たかしらぬ 案山子か

うしろに人も見へず 今此繩をこう曳いたれハ 笑 ア、能いさ
いくかしてあるハ 曳けハ揚る ゆるむれはうつ揚る うつく
くく 笑 余り面白し 寂ひとせめられてみよふ セメスシテ

アト\がつきめ シ\是りやなんとする アト\なんとする お
のれよふ瓜を取おつたな シ\身共ハ畑主ちや ア\ヲノレまた
そのつれをいう シ\ア、免るしてくれい ア\免るせ おのれ
瓜蔓迄能ふ揚よつたな シ\ア、免して呉いく ア\免せ
なんとして呉れよふぞ シ\免して呉いく ア\アノ盗人め
やるまいそく シ\しかく ア\シカく

〔No.88 悪坊〕

理 真 田 米

No.88 書誌情報

● 楮紙仮綴一番本（第一丁に題と署名を記して表紙とする）、縦
245mm×横165mm、〔表紙（打付）〕悪坊 六義 〔署名〕
まきの方叔

台本の特徴

● 『古典文庫』や『狂言集成』の本文とは明らかに異なる。
● 『波形本』に近い。ただし、アド禪僧について、波形本は東
近江の出身とするが、当台本や安海熊野神社蔵No.150（古市音
蔵写）は西、近江とする。ちなみに『天理本』や『古典文庫』
は西、近江、三宅派の台本である『狂言集成』は東、近江。

〈参考〉前掲 注3うち③論文

悪坊 六儀

まきの 方叔

悪坊

アト\是ハ西近江の者て御座る 東近江へ用事有て参る 只今ハ
帰ルさて御座る 先急いで参ふと存る 誠ニ今朝雨か降ふと思ふ
て傘を用意いたいてござるが 殊外よい天気ニ成て御座る 此よ
ふな嬉しい事ハ御ざらぬ シテ\千代かけて御よろこひの御酒を
いざやいわはんのふくく御坊 \ハア 愚僧の事で御ざるか
\いかにもそなたの事じや そなたハとれからとれへ行かしま
す 私ハ西近江の者て御座る 東近江へ用事有て参る 只今か帰
ルさて御座る \何んじや西近江か東近江へまわつた \イヤ左
様てハ御座りませぬ 西近江の者て御座る 東近江へ用事有て参
る只今か帰ルさて御座り升 \夫は幸じや 御供申さふ \見ま
すれば御土そうニ御座り升 私共のよふな者ハ御供ニハ参り升ま
い 先ツ御先へ参りましふ \イヤく出家と士とは似合たつれ
じや 是非御供申そふ \左様ニ御座らバ先ツ御先へ御出なされ
ましよふ \サアく行かしませ \先ツ御出被成ましよふ \
先へ行といふに \左様ニ御座らハ御ゆるされましよ \扱御坊
ハとこやらの人て有つたのふ \私ハ西近江の者て御座る 東近
江へ用事有て参り只今か帰ルさて御座る \ヲ、ソレく西近

へこきよふ エイ〜 そりや〜〜〜 笑 こんとは
瓜をだいだハ 笑 こゝにもある 笑 是りやたまらぬ面白い事
ぢや ものハ聞いて置かう物ぢや 扱こんとハとちらへこきよふ
ぞ 又今度ハこちらへこきよふ エイ〜そりや〜〜〜
ト言フテカ、シヲ見ル ア、御免せられましょふ〜 私はどう
にまよふて参つた者て御座^{マゴ}が 瓜ハ壱ツ武ツならてハ取りハいた
しませぬ 是は皆お返し申ましよふ程に とふぞ命は御たすけな
されて下され スコシアヌク 申そのよふに物をお、せられいでハ何
とも迷惑に存し升 どうふぞ命はおたすけ成れて下され 申〜
〜 是ハ如何な事人かと見たれハ案山子じや エイ腹の立 此
様な物は曳つくづして置たがよい 其儘人の様にあつたによつて
能いきもをつぶした 余り腹の立 瓜蔓もあげておかふ むり
〜〜〜 むり〜〜〜 ハア是て腹をいた 扱最壱ツ二ツ取て
行かふ いや〜畑主の見舞ぬ内に先急いで帰らふと存ル
瓜を両ノ袂へ入レテ直ニ帰ル
アト、扱も〜急しい事て御座る 又今日も瓜畑を見舞と存ル
誠に百姓程たのしみなものハ御座らぬ 色〜の種を卸せハさま
〜の物か出来ルニよつて此様なたのしみなものハ御座らぬ イ
ヤ何かと言う内にはぢや 是ハ如何事「りや」垣かくつしてある
盗人ても這人はせなんだかしらん 是ハ如何な事 か、しをさ
んぐ〜にしおつた なむさんぼう瓜つるをもあげてうせをへた
扱〜にくい事て御座る 是ハ先なんとしてくれよふぞ イヤこ
のよふなやつハ又今夜も来るもので御座るに依テ 今度ハ某か案

山子に成てかの瓜盗人をとらよふと存ル このよふな腹の立事ハ
御座らぬ 瓜をとるならとるで御座らふに 瓜つる迄あけてうせ
おつて 扱も〜にくい事て御座る おのれ今夜こいかしきたな
らバ 某かいたしよふか御座るト言うてカ、しになる
シテ〜さても〜迷惑な事て御ざる やぜんゆ「ナ」瓜をさる御
目掛ケらるゝ御方江進じて御されバ されハそちかつくつたかと
仰せられたによつて ハアト申て御されは あまり風身^{フデ}か能程
にモ一ツ武ツきれいと仰せられた 今更造らぬとハ申されず 又
昨夜^{ヤゼ}か瓜畑江参り モ壱ツ二ツ取て帰ろふと存ル 誠に彼様の事
と存したれハ か、しをもくつさず 瓜つるをもあけて置まい物
を 今更こうかいたするて御座る イヤ何かと言う内にはぢや
あら嬉しや畑主が見舞わぬと見て垣もくつした儘ぢや 先はい
ろう さらハ取ていかふ ヲ、是じや 見舞ぬてはないわいの
こんとは案山子をつりは拵て置いた イヤノヲやせんハ^ナ其方て
いかうきもをつぶしておりやる 笑 ア、あのかかしハ何やらに
似たよふなが イヤ当年のきおん^ナハ若い衆の鬼か罪人をせむる
所を山につくつて出そふという事てあつた あのか、しを罪人に
して 某か鬼になつてひとせめせめて見よふ 幸い是に垣をくつ
した竹かある 是てせめよふ セメハタラキスシテ 笑 人形ぢやに依
テせめこたへかない またくじとりの事ぢやに依て 某か罪人に
成るまい物でもない 今度ハあの案山子を鬼にして 某か罪人に
成てひとせめせめられて見よふ 幸い是に能い縄かある 是てせ
められよふ セメ謡 あいたし こ

其名ハくちせざりけりと 三度までおしかへしうとふ 大将
 な、めに喜ふて 三杯ほし給ひ 程のふてきをほろぼし天下一と
 ふの御代となし給ふ いてかの諷のおんしよふをあたへんとあつ
 て うたのしよふといふ大小給り ひ子ひ子お、父よりひお、父
 親で有ル物 今某ニ至ル迄テ 活計かん楽にほこるも 皆此諷
 のゆへ成り イ、ヤかよふな大事の諷を およそにしてハかなわ
 じと 戌亥のすみに段のつき 石のかるとを切てすへ 一ツ諷ふ
 てハとふと入レ 二ツ諷ふてハとふと入レ 石のかるとの蓋の
 ふふとする程うたい入レ 七糸にしめを張り 謡野大明神トかく
 をうつてあがめ申すうたいを 何んぞヤ 己か某に暇をもこわす
 よそへうするのみならず あすこへいては二千石 こ、へいては
 二千石と なまくさい口てうとふならハ 某の天罪も如何しや
 しせん切テ捨て申そふ おなをりそへ アト泣工、へ、シテ
 扱々己レハひきよふなやつの ぶに首さげらりふ己レめか おな
 をり切るふとい ば、につこと笑ふて切りよふ所を 其さめ
 くとほゆるハ はハき元二名残かおしいか 又ハきつさきに名
 残かおしいか 真すぐになかおろふ アトはハき元二もきつさ
 きにも 名残ハおしふハ御さらねど あハれな事を思い出しまし
 た シテ夫レハ如何よふな事じや アトお前お、殿様の時 御茶の
 通いヲいたしまするとて 畳のへりにつまついてころびましたれ
 バ 扱々怨いやつしやとあつて おそばの尺八を御取て 御ちよ
 ちやく二成お手元と 今なをりきろふと仰らる、御手元かあまり
 よふにてなかれ升る 泣 シテ泣 誠ニけなけな物ハさいこ二哀

ナ事を思ひ出すといふか汝か事しや も早太刀もさや二納むる程
 ニそこを立て アト立板に水をなかつよふに仰られても 御腹の
 入は早ふ御座るツタ それ迄かよふにました シテ是く此太
 刀も取らするそ アトお心の広ひ処か猶よふにました シテ刀もや
 るそ アト忝のふそんじ升る シテ扇も取らするそ アト有難ふ存升
 る シテこふ行処も似タカ アト其假て御座り升ル シテまかる処も
 似たか アトいきうつして御座り升ル シテ扱々哀ナ事を思い出た
 ナア アト哀ナ事ニ御座り升ル 二人泣 シテやい太郎冠者 アトハ
 シテよしナイ事ニらくるいをした 子か親に似る程目出度事ハ
 無イ いざとつと笑ふて帰ルまいか アト一段とよふ御座りませ
 ふ シテつつと是へこい アト畏て御座ル シテサア笑へ アト先お笑
 被成ましふ シテアト二人 フハアくフハハハく

シテ 主 のし目長上下

太刀 扇持ツ

アト 太郎 常之通

庚 明治十三年

辰 十月十八日書之

牧野新作殿写

77 早や是しや 某が声ト聞たとならハ主留(マユ)を使ふて御さるふ 作り

こへをいたいてよびいたさふト存ル 物申案内申 アト、やらきト
くや 夜前罷帰ツたを早となたやら御存んして表二案内が有ル
案内とハ誰ぞ シテ、物申 アト、となたて御座る ハア引 シテにわ

かの御いんきん迷惑ていたすお手あけられい アトハア シテ扱々
己ハ悪いやつの 此間ハたれにいとまをこふて何方へうせた

アト其事て御さりまする お暇の義を申し上ふと存て御座たれ
共 一人召使ふる下人の事て御座れハ申上たり共下されまいと存
て 忍ふて京打参りをいたいて御さる シテやら珍らしや 一人

理 使ふ下人か京打参りをすれハ 主に暇をこわぬが法てすか アト

真 ハア引 シテエイ引 アトハア引 シテ急度せつかんなくわよふと思

ふテ是迄ハ立越タレ共 京打参りと有れハ仏神への恐れも有 此
度ハゆるす そこを立て アトそれハ誠ニ御座るか シテ誠てのふ
米 てハ アト御真実て御座り升か シテ弓矢八幡ゆるすぞ アトやら心

安ヤ シテ何んと気をつめたか アト何か常の御気色とハちかいま
したに依て すは御手打にも合ふかと存て 身の毛をつめて居ま
しました(マユ) シテ汝のていかそう見へたに依 此度ハゆるす 以来

をたしなめ アト畏て御座る シテ扱都ニハ何か流行ぞ アト唯今ハ
諷か流行ます シテ此天下納た目出度御代しやに依て 諷か流行
いて叶ぬ事しや アト夫レについて私ハてかいた事が御座り升ル

シテ夫レハ如何よふナ事しや アトスハ諷と申とかたすみへよら
せられて 畳のちりをひねらせらるゝを ござしよふしにそんなして
御まへへ教へ申そふ存て 諷を習ふて参りました シテ夫レハ

てかいた 諷を聞ふ其しよふきもて アト畏て御座る シテせふき

く アトハア引 おしよふき シテなんと囃子のものでも呼て
やろふか アトイヤそれにハ及ませぬ 私の心拍子て諷ましよふ
シテそふ有バ早ふうたへ アト畏て御座る 二千石の松にこそ、

千歳を祝ふ後ト迄も、其名はくちせさりけりく下 三度諷返シテ
ひさりおるふをく アトハア引 シテ南無諷の大明神 唯今の諷

ハ某かうたはせたのでハ御座らぬ 真平御免なれ 扱々己レハ怨
いやつの 今の諷をしうてうたふたか しらいてうとふたか
アトいや何共存しませぬか 都て流行ましたに依て習ふて参り

ました シテ何んの都て流行うふぞ 己かうとふて流行かいたも

のであろふ たちまちせい、ばいせふと思へ共 此しさいも語らず
せいはいしたとならハ各々利不人ナ事をしたと御ほうへんも如何
しや 此しさいの語り其後せいはいする程に そう心得へ アト

ア、それならハ諷升まい物ヲ シテ語り 先ツ某乃親の親ハお、
父よ アト御々父子様ニ御座り升ルカ シテ其又親の親のつふとあ
なたの親の代に有りし 安部定とふ奥州衣川の上かくにこもり

せいしよふ害にまかせらるゝ間 都よりもうつての大将二下る、
其時の大将にハ かたしけ無くも八幡殿(マユ)にニテ有しよな 先ツ
ハせめもせめこらゑもこらへけるぞ 前九年後三年合て十二年三

ツ月といふものせめらるゝ、 其時八幡殿に御酒ゑんの始りしに
某の先祖のお、父御しやく参る 大将たぶくと請ケしう言ひト
ありしかば よろいの引合より扇をぬき出シ ちようしの長を
ちよふちよふとうつて 二千石の松にこそ 千歳を祝ふ後までも

教授の様相や演目の継承といった問題について考える上で、貴重な資料といえよう。

三 翻刻について

今号以後、牧野本の翻刻を連載するが、今回は「No 2―8 二千石」「No 77 瓜盗人」「No 88 悪坊」の三番を取り上げる。いずれの曲についても、牧野本のおおよその性格を示すため、翻刻の前に簡単な書誌と他本との比較に関するコメントを付した。

〔謝辞〕 本稿を成すにあたり、魚町能楽保存会をはじめ、東海能楽研究会のみなさまからご協力を賜りました。なお、本研究は JSPS 科研費 JP17K02431 の助成を受けたものです。記して深謝申し上げます。

翻刻

〔凡例〕

- 漢字の字体を通行のものに改めるとともに、原文の改行は無視した。
- 原文には句読点はないが、詞章の区切り等に一字分の空白を置いた。
- 本文中に抹消・訂正のある場合、
― 原文が抹消・訂正されている場合は抹消線を施し訂正後

の本文を「」に入れて示した。

― 抹消せずに別の本文が併記される場合は傍線を付して、訂正後の本文を「」に入れて示した。

〔No 2―8 二千石〕

No 2 書誌情報

- 白茶地茶色斜縞模様 縦247mm×横163mm、様々な筆者による台本を合冊した本、「外題（打付）第弐号
- 《二千石》の「シテ」「アト」等、役名と合点はすべて朱筆
- 役名は墨筆（本文と同筆）。奥書は朱筆（本文と別筆）
- 『古典文庫』や『狂言集成』の本文とは明らかに異なる。
- 安海熊野神社蔵 No 7―3（古市猪兵衛写）は、ほぼ同じ本文。

台本の特徴

二千石

シテ 罷出たる者ハ人の御存シの者て御さる か様ニ己レハ申せ共
召使ふ者ハ只一人 一人使ふ下人が某に暇をもこわす何方やら
参つてござる 承ハレハ夜前罷歸たと申せ共 未タ某か前へ出ぬ
ごんごとふだん 怨いやつて御座る 今日タかれがたくへ立
こへ 急トせん かんなくはよふと存ル 扱々にくいやつて御座
る 早々某か前へ出ぞならハそれ程にも存スまいに 忍ふて居候
ハ猶以て怨いやつて御座る イヤ何角といふ内にかれがたくハ

79 ○牧野新作筆であることが奥書などから確実な一番本

●もとは一番本であったが現在は他の筆者による台本と合冊されているもの

〔No 2―8 二千石〕(奥) 庚明治十三年辰十月十八日書之 牧野新作殿写

〔No 18―24 八島 間〕(奥) 于時明治十六年未七月十四日早川六儀写 牧野新作

〔No 18―17 小鍛冶 間〕(奥) 明治十七年二月以鳥居氏六儀有写候 時同年三月□日八丁深井清翠氏地内ノ舞台新ニ設ケ依テ開ニ

理 小鍛冶間相勤ム 方叔写

真 〔No 18―21 加茂 間〕(内) 満喜能方叔写 (奥) 十八稔名古屋ニテ 写ス

田 ●仮綴の一番本

米 〔No 77 瓜盗人〕(奥) 牧野新作

〔No 88 悪坊〕(表紙) まきの方叔

〔No 101 茸〕(表紙) 牧野新作 (裏表紙) 花押

○牧野新作筆であることが奥書などから確実で、一冊全体が牧野本だけで編集されているもの

〔No 57〕(奥書) 明治十九年之写 満喜能方叔 (花押)

―1 大般若・―2 千切木・―3 釣狐・―4 小うた (5番)・

5 口真似・―6 宝笠・―7 連箸・―8 牛馬・―9 懐中鞆・―10

八幡前・―11 六地藏・―12 蚊相撲・―13 籠太鼓 間・―14 仁王

・―15 歌仙

また、右の8点に加え、

○牧野新作が実際に上演したときの演出が記録されたもの

〔No 9―10 隠狸〕

以上について注意すべき点を述べておく。

まず〔No 2―8 二千石〕の奥書が「牧野新作殿写」となっていることが挙げられる。これはおそらく奥書のみが後年に別人物によって記されたもので、本文の書写者は牧野新作と認められる。

次に〔No 9―10 隠狸〕については、表紙の署名が「田沼」を抹消して「鳥居」に改められ、奥書に「明治十六年未七月十五日熊野神社祭礼ニ付魚町献社内ニ於テ牧野新咲^{つぎ}方叔勤ム之依テ六儀相違有之ニ付加筆ス写」と記されるものである。表紙の署名については以前述べたが⁶、幕末の吉田藩士である田沼の台本が、明治時代前半に活動していた魚町の人物・鳥居寅蔵に渡ったことを示している。つまり、「No 9―10 隠狸」の奥書は、鳥居寅蔵が明治16年に牧野新作の上演を見た際、その演出を、幕末に田沼が書写した台本に書き加えたものなのである。

以上のように牧野本は、所収曲目は多くはないが、その中には《釣狐》のような大曲や、《歌仙》のように流派間の違いの顕著な曲が含まれている。明治10年代における地方の狂言について、

(6) 前掲注(3) うち②

江戸時代後期から明治期にかけて、新城の町人の指導には三代目と四代目の早川幸八があたっていた。魚町に關しても、文政10年ごろの番組に「早川（当時は四代目）が見えることから、同様だったと思われる。じっさい、筆者のこれまでの調査から、魚町の台本は早川幸八家伝来の『波形本』系統に属するとの知見を得ている。³⁾

ただし、演目によっては、概ね『波形本』に拠っていないながら、細部で『波形本』に特徴的な本文とは異なっていることがある。その要因としては、三代目幸八が弟子を指導する際には、全体を二代目幸八の記した『波形本』に拠りつつも、細部を山脇家に合わせて調整したからだと考えられる。

このような、いわば「魚町周辺や新城で用いられた標準的な台本」は、一部の演目については、魚町の台本のうち最古の文政10年代にはすでに祖型が成立していたようである。だが一方で、文政期に使用された台本には『雲形本』系統の本文も混在している。また、幕末に吉田藩士が所蔵していた台本を、明治期に魚町住人が訂正して使用した例も見られる。そもそも、プロの狂言役者で

ある早川幸八家の台本がそのまま弟子たちの指導に用いられるとは限らない。

こうした問題を鑑みた上で、魚町の狂言台本の「要」的な位置を占めるのが、今回取り上げる牧野新作関連の台本だと思われる。牧野新作は魚町の隣町である呉服町に住んでいたが、もとは新城の人で、新城富永神社の祭礼能にたびたび出演し、新城では「先生格」として扱われていた。⁴⁾『山脇門人帳』⁵⁾によれば、明治17年から34年にかけて、「千歳・三番叟」をはじめ『釣狐』『金岡』『花子』『三番叟橋懸舞』といった、大曲や重い習事の相伝を受けており、相当な実力者であった。

いわば「女人はだし」の牧野新作が、狂言を嗜む魚町住人に及ぼす影響は大きかったのではないだろうか。つまり、魚町の狂言台本を考えるうえで牧野本がひとつの基準となるのではないかとの観点から、他本に先駆けて牧野本の翻刻を行うものである。

二 牧野本について

調査の現段階で、魚町蔵の狂言台本のうち牧野新作が関わっているものとして扱うことができるのは以下の9点（所収演目狂言18番、能の間狂言4番、小歌5番）である。

- (3)
- ①雲形本研究会・米田真理「豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵狂言伝書の性格」『名古屋芸能文化』第21号、平成23年12月
- ②雲形本研究会・米田真理「豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵狂言伝書の性格（二）」、『名古屋芸能文化』第22号、名古屋芸能文化会、平成25年
- ③米田真理・雲形本研究会「豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵狂言伝書の性格（三）」、『名古屋芸能文化』第29号、名古屋芸能文化会、令和1年

- (4)
- ①大原紋三郎「新城祭礼能番組帳 上・下」、非売品、平成8年
- ②大原紋三郎「新城祭礼能番組帳解説」、非売品、平成9年
- (5) 狂言共同社蔵。佐藤友彦氏ご指示による。

81 川幸八によって行われてきたが、牧野本にはその際に用いられて

いた台本の祖型が残されていると考えられるからである。

なお、本稿中「No」で示す番号は、前掲『東海能楽研究会 催花賞受賞記念論文集』所収一覧表に記載される資料番号である。

必要に応じて、資料の何番目に収められているかを併せて記した。例えば、「No 57-8 牛馬」であれば、資料No 57の8番目に収められている《牛馬》という意味である。

一 牧野本の背景

牧野新作の台本について述べる前に、その背景となる同時期の名古屋の狂言に触れておきたい。¹⁾

狂言和泉流は大別して、江戸時代の尾張藩お抱え役者の流れである「名古屋派」と、金沢藩の役者であった初世野村萬斎の流れである「三宅派」の二派に分けられる。

さらに、「名古屋派」のうち江戸時代に活躍していた家としては、

- 江戸時代初期に尾張藩に召し抱えられた初代山脇和泉守元宜を祖とし、代々同藩お抱え役者をつとめた山脇家（家元）
- 三代山脇和泉道甫元信の高弟だった早川幸八家

(1) ①小林貢・西哲生・羽田昶『能楽大事典』平成24年、筑摩書房

②佐藤友彦・林和利「和泉流山脇派狂言の特徴―三宅派との比較―『楽劇学』第五号、楽劇学会、平成10年

● 同じく山脇藤左衛門家

● 江戸時代中期に四代又三郎信明が尾張藩に召し抱えられて以来、京都在住のまま同藩お抱え役者をつとめた野村又三郎家の四家がある。

このうち、家元である山脇家は明治14年に上京し、その後いつたん断絶したが、昭和期に三宅家の役者が襲名・継承し現在に至る。一方、山脇家の芸系を受け継ぐ四代早川幸八の高弟と、山脇藤左衛門家の九代得平の高弟たちによって、明治24年に結成されたのが「名古屋狂言共同社」（以下「共同社」と称す）である。結成時の同人の子孫たちを中心に、新たな弟子たちも加入し、現在、野村又三郎家（昭和34年名古屋移住）とともに、名古屋の狂言を牽引する存在となっている。

さて、共同社に残されている台本の中で、豊橋魚町の狂言台本と密接に関わるのが通称「雲形本」と「波形本」の二種である。

雲形本は文政年間（1818〜30）、山脇和泉七代元業（もとなり）の筆になる。元業が家元としての使命感のもとに編集した台本で、共同社の現行の台本は、この「雲形本」に拠っている。

一方「波形本」は天明6年（1786）ごろ、二代早川幸八によって筆写された。幸八が三宅派の狂言師と交流があったことから、三宅派に近い演出も見られる。²⁾

(2) 雲形本研究会「和泉流狂言台本の比較研究―『雲形本』を中心に

―のうち佐藤友彦担当分『波形本』と『雲形本』の比較分析』名古屋芸能文化』第3号、名古屋芸能文化会、平成5年

豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵 牧野新作（眞三九・方叔）関係伝書
翻刻と解題 [一]

Kyogen Drama Scripts Transcribed by Shinsaku Makino and Possessed by Yasumi Kumano Junja in Toyohashi, with Reprint and Bibliographical Introduction

米田真理（朝日大学 日本語研究室）

Mari YONEDA

Department of Japanese, Asahi University

解題 はじめに

豊橋の魚町では江戸時代から戦前にかけて、町内の安海熊野神社を会場として、同社の祭礼への奉納を中心に能楽（能と狂言）が盛んに行われていた。その際に用いられていた能面や能装束などには吉田藩主であった大河内家由来のものも含まれ、現在も魚町能楽保存会によって大切に保管されている。

また、平成18年、筆者の所属する東海能楽研究会の調査により多数の和泉流狂言伝書が発見された。それらは江戸時代後期の文政年間から太平洋戦争直前までの幅広い年代を網羅し、資料数は

計153点にも及ぶ。書写には多数の人物が関わっており、その来歴も魚町はじめ近隣町の住人のほか、吉田藩士や、魚町と交流のあった新城の人など多彩である。

これらの狂言伝書のリストは、『東海能楽研究会 催花賞受賞記念論文集』（東海能楽研究会、平成19年3月、非売品）所収一覧表に記載されている。また本文の分析は著者を含む雲形本研究会により進められているが、その過程で、今回取り上げる牧野新作（眞三九・方叔）関係の台本（以下「牧野本」と称す）が目ざれた。というのは、江戸時代後半から明治前期まで、魚町や新城の狂言の指導は名古屋の狂言役者である二代目および三代目の早